愛知工業大学研究報告
第 49 号　平成 26 年

教師を目指す学生の「志」の昂揚を図る
―　「生徒を構う」教師の育成を目指して　―

To boost the ambitions of students aiming to be teachers
－So that they may go on to become effective mentors for the next wave of high school students－

長谷川　省一†
Shoichi HASEGAWA

Abstract　Increasingly, teachers must have a passion for developing well-rounded students; it must be their mission to instill the same enthusiasm in those students who will be responsible for educating future generations. It is crucial to the success of a teacher-training course that students be given ample opportunity to develop their teaching skills through practical experience.

In this paper, the author suggests three critical methods in our teacher-training course as follows:

(1) A refresher of prerequisite relevant background information prior to each standard lecture.
(2) Emphasis on practical experience (i.e. learning by doing).
(3) Encouraging and maintaining student engagement and motivation throughout.

Secondly, the author presents that a “teaching profession forum” led by a graduate of our college and an “educational discourse meeting” with a young high school teacher can have a strong impact on all students of the teacher-traning course.

It is presented in the last part of this paper how a tailored curriculum emphasizing practical experience and motivational techniques will benefit the students of our teacher-training course and how this curriculum differs from that of a general student.

１．はじめに

文部科学省によれば、平成 23 年度の公立学校教育職員の分限処分者は 8,756 人である [1)]。このうち病気休職者は 8,544 人で、この中には精神疾患が 5,274 人含まれている。教師には、林間学校に参加した小学生の転落事故で学校側の責任が追及された [2)] ように、遠足・修学旅行等の非日常的状況に限らず、特別活動や理科及び家庭科での実験・実習授業及び体育の実技授業はもとより、学校生活全般において事故発生リスクを考慮した指導・監督に当たらなければならない中で、近年増加している保護者からのクレームに対する対応も要求されてきている。

教員採用にあたって各教育委員会が掲げている「求める教師像」に関して、今後ますます「実行力に富み、粘り強さがある人」[3)] が強く求められていくことが容易に想像される。

学校教育や教師に対して社会の厳しい目が注がれている一方で、視点を変えれば、小学校に続いて中・高校でも新しい学習指導要領が開始され、ベテラン教師の大量退職に伴う新規教員の採用という世代交代の時期を迎えている。

このような時こそ、常日頃から生徒とのコミュニケーションを自ら積極的に取り、個々の生徒との信頼関係を築き、加えて、担当する教科のプロを目指して分かりやすい授業作りを心掛ける。そのような熱き心を持った教師の下で生徒が楽しく学校に通い、その姿を見て保護者

†　愛知工業大学　基礎教育センター（豊田市）

が安心する。

だからこそ、「生徒を構う」をキーワードに、熱き心を持った教師を育成することが、大学の教職課程に課せられた使命であると考える。そして、教師を目指す学生の志の昂揚を図り、体験学習を通じて teaching skill を習得する環境作りを図ることこそ、教職課程の展開において最も念頭に置くべきことである。

本研究は、本学の教職課程に学び教師を志す学生に対して、どのような配慮をすることが効果的であるのかを模索した実践的研究であり、その過程で得られた「教職課程の学生と一般学生との意識の違い」にも触れていく。

２．本学教職課程で重視する取り組み

本学教職課程では、次に示す三点を重要視している。

① 「学び直し」を教育課程の枠内で
② 体験を通じた学び（learning by doing）
③ 早い段階からの強い動機付け

２．１ 「学び直し」を教育課程の枠内で

教師を志す学生を支援するべく、本学教職課程では土曜日の「自主ゼミ」や「自主勉強会」として、「教員採用試験　演習講座」を開講して対応してきているが、参加学生はいまだ少数に留まっている。

加えて、本学の学生には、全般に３つの学力不足が目立つ。即ち、読解力の不足、漢字力を含めた記述力の不足、計算力の不足である。

これらに対する有効な対策としては、親に対する経済的負担を軽減すべく土・日曜日にアルバイトをして頑張っている学生に対しては、強制できないのならば、普段の授業の中で補っていくしか道は無い。

２．２ 体験を通じた学び（learning by doing）

体験による学習（learning by doing）は、古くから使われている極めて自然な学習方法であり、デューイの提唱する「経験主義」に基づく考え方によれば、学習者の実際的な活動を通して学習効果を狙った学習形態である。このことは、教師を志す学生を支援する上で、模擬授業の展開と共に重視すべき事であるとの考えから、後に記述する教育交流事業を企画し、毎年実践してきている。

２．２．１ 模擬授業の限界

模擬授業後の討論において、どの学生も「自分とは違った視点・切り口・方法での教え方に気付かされた」と述べているように、顕著な効果が確かに認められるが、一方で、互いに気心の知れた仲間であることに起因する「甘え」があることも否めない。

このことは、本学においては、「授業中の生徒指導」をテーマに据えて、ふざけた生徒役やそれをたしなめる生徒役等といった、ロールプレイングを敢えて導入した模擬授業においてさえも認めざるを得ない。

さらに、模擬授業に対して評価させると、声の大きさとか色チョークの使い方等の些末な技術論に偏ってしまう傾向がきわめて強く、「生徒を構う」という観点で模擬授業を見つめている学生は、指摘しない限りはほとんどいないというのが現状である。

２．２．２ 教育交流事業の実施

「いち早く学校現場に入って、教師の仕事や思いを感じてほしい」とは、教師を志す者が学校現場に入るメリットとして多くの教師経験者から耳にする言葉である。塩澤（2012）[4]によれば、「もっと早い段階から現場を知って、大学で理論を学び、それを現場で確認することによって、教師に求められる実践力はついていくもの」である。

本学教職課程では、このメリットを活かすべく、平成 22 年度から地元の県立高校の協力を得て「教育交流事業」を企画し、高校化学の授業において AT 体験実習と One Point Lessen 体験実習（以下、OPL 体験実習という）を次のように毎年実践してきている。さらに今年度は、実験・実習授業での AT 体験実習を経験させるよう配慮した。理科の授業では実験・実習は欠かせない授業であり、そこには入念な事前準備や安全への特別な配慮等、体験させておくべき内容が詰まっている。特に、OPL 体験実習では事前に詳細な打ち合わせ、擦り合わせを行って高校側と大学側の授業を緊密にリンクさせ、実習前後の大学での講義において実習授業で取り扱う内容について事前事後演習を行って、より効果が上がるように配慮している。

実習先：　愛知県立瀬戸北総合高等学校
（平成 23 年度より、県立瀬戸北高等学校から校名変更）

・平成 22 年度
　後期　２回実施
　　高校側：　３年生理系化学選択者　15 名
　　大学側：　理科教育法２受講生　　10 名
　　10 月 26 日（火）、16 日（火）

・平成 23 年度
　前期　２回実施
　　高校側：　２年生理系化学選択者　35 名
　　大学側：　理科教育法１受講生　　24 名
　　6 月 2 日（木）、16 日（木）
　後期　２回実施

高校側：　２年生理系化学選択者　35 名
大学側：　理科教育法２受講生　　21 名
10 月 27 日（木）、11 月 17 日（木）

・平成 24 年度
前期　２回実施
高校側：　２年生理系化学選択者　31 名
大学側：　理科教育法１受講生　　8 名
6 月 7 日（木）
中和の量的関係について問題演習時の AT
6 月 21 日（木）
水素イオン濃度と pH について問題演習時の AT
（その様子を図１に示す）

図１　問題演習とその解説（OPL）

後期　３回実施
高校側：　２年生理系化学選択者　31 名
大学側：　理科教育法２受講生　　8 名
11 月 15 日（木）
酸化還元反応について問題演習とその解説（OPL）
11 月 22 日（木）
ボルタ電池・ダニエル電池について授業（OPL）
12 月 6 日（木）
高校生と実習生とで反省・討論会

・平成 25 年度
前期　３回実施
高校側：　２年生理系化学選択者　32 名
大学側：　理科教育法１受講生　　18 名
5 月 30 日（木）
酸と塩基について問題演習時の AT
6 月 13 日（木）
中和の量的関係について問題演習時の AT
6 月 20 日（木）
水素イオン濃度と pH について問題演習時の AT
（その様子を図２に示す）
後期　３回実施
高校側：　２年生理系化学選択者　32 名
大学側：　理科教育法２受講生　　14 名
11 月 14 日（木）
酸化還元反応について問題演習とその解説（OPL）
11 月 21 日（木）
ダニエル電池について授業（OPL）
12 月 5 日（木）
電気分解について実験授業時の AT
（その様子を図３に示す）

図２　問題演習時の AT 実習

図３　実験授業での AT 実習

２．２．３　「大学コンソーシアムせと」協働プログラムへの参加

Learning by doing のメリットを活かすべく実施してきている教育交流事業であるが、一方で困難や欠点も多く抱えている。

第一に、双方の授業時間をリンクさせることが難しい点である。

そもそも双方の授業時間帯が大きく異なっている（高校は 50 分、大学は 90 分授業）上に、大学側にとっては、

学生の高校での実習時間と高校への往復の所要時間を含めた時間割の確保が大きな障害になってくる。

現在実施している講座「理科教育法１・２」については、本学応用化学科の協力を得て、理科教育法の授業時間を２コマ連続で確保していただくことにより、高校への往復の所要時間を含めても、高校での実習後の本学での講座に学生が間に合うようになっている。

第二に、大学内での授業時間割の設定に関する問題がある。

教職課程には本学の全学科の学生が登録しており、各学科が独自に時間割を設定している中で、教職課程の希望する特定の時間を全学科の時間割の中に横断的に設定することは現実的に不可能であり、理科教育法を受講している応用化学科の学生に対してしか実施できていないのが現状である。

そこで、教職課程で学ぶ応用化学科以外の学生に対しても、この learning by doing のメリットを活かすべく解決策として企画したのが「大学コンソーシアムせと」協働プログラムへの参加である。

瀬戸市教育委員会を通じて紹介していただいた地元の中学校の「夏休み学習会」に学習支援員として学生を派遣し、個別指導であるが AT 実習を体験させることができるようにした企画で、平成 24 年度から次のように実施してきている。単に学生だけを学習支援員として派遣して AT 実習を体験させるのではなく、事前指導を入念に行った上に担当教官が付き添い、AT 実習時に現場で適切な指導・助言を加えているのが特徴である。

・平成 24 年度
実習先：　瀬戸市立幡山中学校
時　期：　8 月 27 日、29 日、30 日の３日間
　中学側：　３年生　延べ 214 名
　大学側：　電気学科、建築学科、応用化学科等　6 名

・平成 25 年度
実習先:　瀬戸市立祖東中学校(その様子を図４に示す)
時　期：　8 月 20 日～23 日の４日間
　中学側：　３年生　延べ 60 名
　大学側：　電気学科、建築学科、都市環境学科、経営学科、応用化学科等　14 名

２．３　早い段階からの動機付け

本学では教職課程の学生を対象に、後輩へのアドバイスを兼ねて毎年秋に「教育実習報告会」を開催している。その報告で「教育実習を終えて、教師になりたいという気持ちが一層高まりました」という感想がよく聞かれるが、問題なのは、教員採用試験に対する対策に本気になる時期までもがこの感想と一致している点である。

図４　中学校での学習支援

即ち、教育実習後になってやっと高まるという、キャリア意識の低さである。

そのため、より早い段階からの動機付けを次のように心掛けてきた。

① 教育交流事業は教育実習前の３年生で実施している。

② 高等学校から、本学の卒業生を含めて若手教師を講師として招き、後輩へのアドバイス的な内容の講話をしていただく「教育談話会」を、教職課程の講座の中で開催している。

今年度は、次のように２回実施した。

10 月 9 日（水）
　講話：　教科指導と部活動指導
　　―生徒を構うとは―
　講師：　愛知県立足助高等学校　草野教諭

10 月 23 日（水）
　講話：　教師の仕事の喜び
　　―生徒を構うとは―
　講師：　愛知県立半田工業高等学校　池田教諭

③ 本学の卒業生を中心に、多数の高等学校から招いた若手教師を囲んで意見を交わす「教職課程フォーラム」（その様子を図５に示す）を、教職課程の学生に広く呼びかけて、改まった雰囲気の下で、今年度初めて次のように開催した。

日　時：　6 月 29 日（土）10：00～
場　所：　名古屋ガーデンパレス
参加者：　教職課程の学生　40 名
　講師　現役の県立高校若手教師　5 名
　　本学卒業生の新任教師及び講師　7 名

特に、②と③については、教育交流事業の実習先で、協力校の愛知県立瀬戸北総合高等学校長が学生達にされた訓示「君達は、本校の生徒にとっては自分達の近未来の姿である。その君達からの学習支援はより強く彼らの中に響いている。」からヒントを得て取り組み始めた企画

である。

図５　第１回　教職課程フォーラム

つまり、高校生にとって彼らが近未来の姿であるのならば、彼らにとっての近未来の姿は現役の若手教師である。しかも、本学の卒業生であるならば、我々教官が何回も繰り返し言って聞かせる以上にインパクトが強いはずである、との着想に立っている。

２．４　教育実習後のフォロー

本学で教師を志す学生は、その多くが高校の教師として、また、講師として巣立っていく。教壇に立つ学生達に身につけさせておきたい資質として、筆者は「生徒を構う」を日頃から強調してきている。

そこで、高校現場で生徒を構っておられる教師の姿を、実際に彼らの目で観察させて、「生徒を構う」ことの本質を熟慮させたいと考え、今年度は定時制高校に協力を依頼して、「授業見学会」を次のように実施した（その様子を図６に示す）。

日　時：　10 月 16 日（水）18：00～19：00
場　所：　愛知県立小牧高等学校定時制課程
参加者：　「教職実践演習」講座受講生　　32 名

図６　定時制高校での授業見学

３．取り組みの効果について

教育交流事業は、高校側には大学生を AT として活用する機会の創出となって、生徒の進路意識の一層の向上に繋がり、また、大学側にも教員志望の学生に実践的な場が提供されることになっている。

第一に、学生達に AT や OPL の体験実習を経験させることで、貴重な学校現場での指導体験を積ませ、「生徒を構う」という教師に求められる資質の涵養に繋がっている。

第二に、キャリア意識の再確認の貴重な機会として機能している。このことは、後期の参加学生数が前期の学生数より減少していることからも判断できる。つまり、実際に体験実習に参加することで、教職に対する自分の適性を見つめ直していることが見て取れる。

３．１　各取り組みに関する学生の感想とその分析

３．１．１　教育交流事業に関する分析

教育交流事業では高校側の更なる協力を得て、2.2.2 に記したように、今年度初めて実験・実習授業での AT 体験実習を組み入れることが出来た。

この実験・実習授業での AT 体験実習を観察して、実験授業における教師の事前準備、安全に対する配慮、授業の導入とまとめの展開の仕方、一斉指導と個別指導の使い分け、次の授業への配慮等、実験・実習授業でなければ得られない体験をさせることができていることを強く認識した。

今後は、理科教育法の講座の中に実験授業の時間を組み入れて、高校での実験・実習授業の AT 体験実習を観察して得られた知見を、理科教育法の講座の中で活かしていかなければならないと考えている。

３．１．２　教職課程フォーラム、教育談話会、授業見学会に関して

教職課程フォーラムで講師をお願いしたどの先生からも、「毎年、継続して開催してください。そして、機会があれば、再度、後輩達に話がしたい。」との評価をいただいている。このような高い評価は、教育談話会で講師をお願いした先生からも次のようにいただいている。

・貴重な体験をさせていただきました。参加された学生さんが熱心にメモを取りながら聞いてくれて、真剣な顔つきに触れ、圧倒されっぱなしでした。彼らの進路の一助になっていれば幸いです。来年度以降も、是非、参加し、教師の卵である学生さん達に私の思いを伝えたいと思います。
・学生さん達の期待に応えられる講話であったかどうか

不安ですが、何とか終えることができてほっとしております。皆さん熱心に聞いてくれ、リアクションも取ってくれて、大変話しやすかったです。「時間は大事なものだ。他人の時間は大事にしなければならない」と強調しておきながら、その私が時間オーバーしてしまって猛反省しております。また、是非、呼んで頂きたいと思います

さらに、次に示すように、学生の感想からもこれらの企画の効果を認めることができる。

・私は剣道以外の知識は無いので、専門外の部活動の顧問になるということを想像するだけで不安でしたが、今回の講話を聴いて、「自分にできることを探して動く」という先生は凄いと思うとともに、そのような行動を通して、生徒に「粘るという強い精神力を持つ人間になってほしい」というメッセージを伝えておられるのだなと思いました。「生徒を構う」ということがどのようなことなのか、少し分かってきたような気がします。
　先生の話から強く感じたことがあります。それは、「生徒との絆や仲間意識」を持つことが、その先生の熱き想いに繋がり、先生の支えになっているのだなということです。
・自らのやりたいことを見つけることや、周りの人達との繋がりなど、「失敗ばかり」と話されながらも、すごく自信に繋がる選択や考え方は、本当に羨ましく感じられました。生徒と触れ合う中で、常に考えて行動し楽しく教師をやっておられて、私もそうなりたいと強く思いました。現在、就職にするか教員になるか丁度迷っていた時期だったので、一層強く私の心に響きました。教師からだけではなく、今回のように、企業人からの話を聞ける機会もこれからは必要ではないでしょうか。
・定時制の授業見学をしてみてまず思ったことは、私が思っていた以上に授業が成り立っていたということである。定時制の生徒を見ただけでは授業が成り立っていないのではないかと思っていたが、教室を見渡してみるとノートをしっかりと取っていて、授業に関する質問も多くしていた。その中で、教壇に立っている先生が、生徒の発した一語一句を逃さず返答していたことに一番凄いと思った。全日制の先生では「静かにしろっ！」と怒鳴りつけて注意しそうな場面でも、先生はしっかりと生徒に接して、興味がありそうな話に変えて生徒を構っておられた。
　今回の見学で、生徒を構い信頼関係を築くことの大切さを再確認できたことが私にとって大きな収穫であった。

学生に対するこのようなインパクトの強さから考えても、これらの企画については来年度以降も継続していかねばならない。

３．１．３　学生の感想を分析して

教職課程フォーラムや教育談話会で講師をお願いしたどの先生からも、「教師を目指す以上、学生の内に様々な経験を積んでおきなさい」とのアドバイスがなされた。ところで、「様々な経験を積む」ことの意味について、学生の感想からは、全ての学生が次のように捉えていると判断できる。（下線は筆者）

・様々な経験を積むことによって自分のスキルや可能性を広げ、<u>視野を広げる</u>ことができる。経験をしたことがすぐに活かせなくとも、いつかは必ず役に立つときが来る。
・様々な経験があれば、それを基に伝えることができる。それに説得力が加わる。経験の豊かさは<u>自分自身に強い武器となる</u>。
・まずは自分のためになる経験をする。それを生徒に伝えることができたらよい。<u>視野を広くする</u>ために多くのことに挑戦していきたい。

一方、定時制高校の授業見学会後の学生の感想で、筆者は、定時制の高校生を授業で構っておられる先生に対して、「公平」ではないという次の学生Ｋの感想に注目したい。

・先生は生徒をとてもよく構っておられたが、生徒が先生に対して「お前」とか名前を呼び捨てにしていること、そして、その事に対して何の注意もしないのはどうかと、強く思った。私の母校同様、先生と生徒の一線はしっかりと保たなければ、<u>公平とは言えない</u>し、その先生の指導に一貫性が欠けてしまうのではないだろうか。（下線は筆者）

３．２　教職課程の学生と一般学生の意識の違い

日頃から教職課程の学生達を観察している筆者は、学生Ｋが感想の中に「様々な経験を積むことで自分の視野を広げる」と「公平とは言えない」という言葉を使ったことに「何かがこの学生に欠けているのでは？」という違和感を覚えた。

この違和感を次のような方法で追究した。

本学の教職課程の学生の殆どは中学校や高校で出会

った教師に憧れ､｢あの先生のような先生になりたい｣と、その教師を理想の教師像として抱いている。

教職課程の学生は個々の教師のどのような特徴を評価しているのであろうか？

また、

教職課程以外の一般学生が教師に対して抱いている特徴と、違いがあるのだろうか？

そこで、中学校や高等学校での生徒指導の場面で、指導を受け入れようとする（した）教師、あるいは、指導を拒絶しようとする（した）教師の特徴・タイプ・イメージをアンケート（図７に示す）によって調査した。

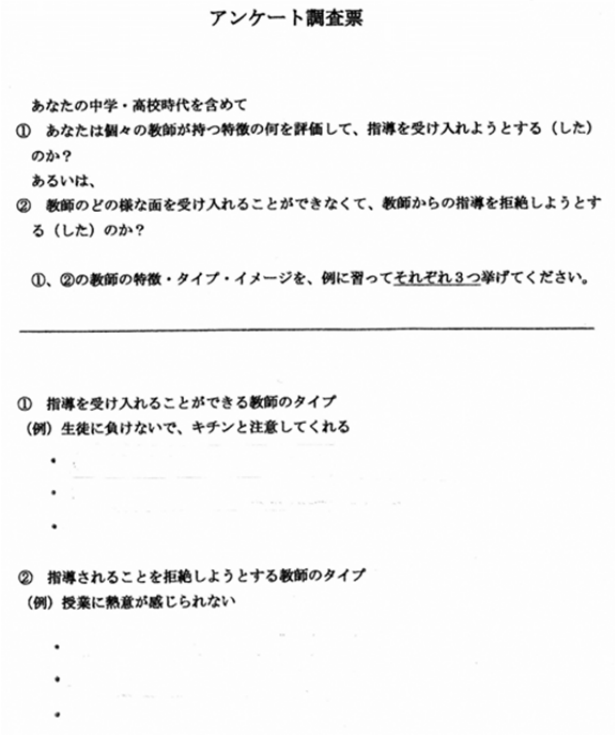
アンケート調査

一般学生

科学技術と自然と人間（総合教育科目２単位）	85 名

教職課程の学生

特別活動論（教職科目２単位）	36 名
理科教育法２（教職科目２単位）	14 名
教職実践演習（教職科目２単位）	32 名


アンケート調査票

あなたの中学・高校時代を含めて

① あなたは個々の教師が持つ特徴の何を評価して、指導を受け入れようとする（した）のか？

あるいは、

② 教師のどの様な面を受け入れることができなくて、教師からの指導を拒絶しようとする（した）のか？

①、②の教師の特徴・タイプ・イメージを、例に習ってそれぞれ３つ挙げてください。

① 指導を受け入れることができる教師のタイプ

（例）生徒に負けないで、キチンと注意してくれる

・

・

・

② 指導されることを拒絶しようとする教師のタイプ

（例）授業に熱意が感じられない

・

・

・

図７　アンケートの内容

学生達は、学校生活における生徒指導の場面で「指導に従おうとする教師」と「指導に従いたくない教師」を、はっきりと区別して認知していると思われる。アンケートに記載した教師のタイプに関しては、原田・刑部（2004,2005）が「中学生が『迫力がある』と認識する教師像、指導を受容しようとする教師像については、カテゴリー構造が見いだせる」[5),6)]と指摘するように、カテゴリー構造が認められた。

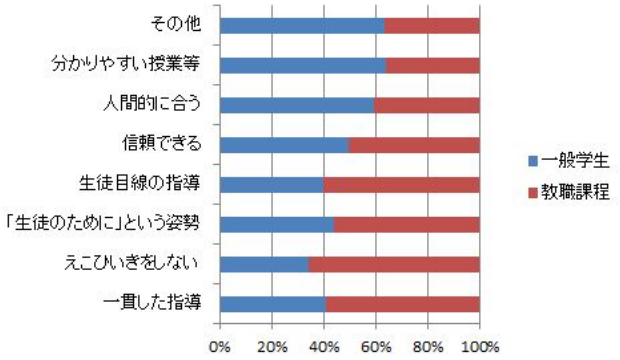
アンケートを集約して、大きく①指導の一貫性、②公平・公正性、③「生徒のために」という姿勢、④指導時の態度、⑤人間的信頼性、⑥人間的魅力、⑦授業の様子、⑧その他、の８カテゴリーに分類した結果を図８に示す。

この調査結果について、筆者は特にカテゴリー①の「指導に一貫性がある（ない）」と、②の「えこひいきする（しない）」という項目に見られる意識の違いに着目したい。

一般に、自分の中の「清」「濁」両方の部分を受け入れ、認めることができたとき、他人への配慮や理解がより一層大きくなってくると言われている。教師自身の中の「濁」の部分を自分自身で自覚していれば、起こりうる不正、失敗に配慮して、生徒にそうさせないような工夫をしようとする行動に出ることができるようになる。

「清濁併せ呑む」という言葉がある。 善・悪のわけへだてをせず、来るがままに受け容れること。度量の大きいことをいう。《広辞苑》

指導に従う教師



指導に従わない教師

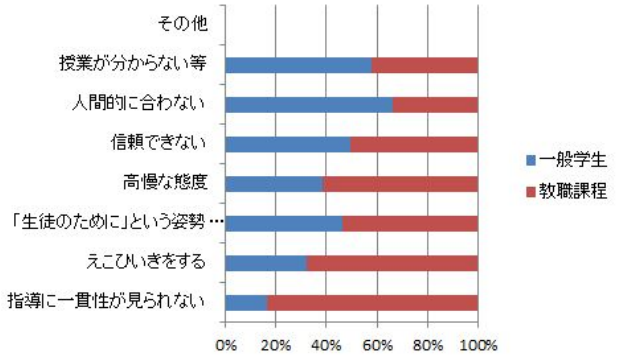


図８　アンケート調査結果

どの高校にも、性行不良の生徒や真面目な生徒の区別無く信頼を得ている教師がいる。このような教師を仮に「カリスマ教師」と呼ぶならば、そういったカリスマ教

師はまさに「清濁併せ呑む」度量の大きさが魅力になっているのではないだろうか。そのような教師は、自分の中の「濁」をはっきりと自覚しており、過去に道を踏み外していても、どこかで、やるべきことをしっかりやって教師になってきている。だからこそ、生徒が悪さをしても、杓子定規の指導はせず、個に応じた的確な指導ができるのであろう。

調査結果からは、一般学生と教職課程の学生とで、教師を見る目に意識の違いが認められた。教職課程の学生は、概して真面目である。だからこそ「えこひいきする」「指導に一貫性が見られない」教師に強い反発を抱いていることが、この結果から判断できる。つまり、「清」「濁」の二面性を考えると、「真面目」＝「清」の側面が強く表れており、あくまでも、彼らの「清」の意識の範疇で視野を広げようと考えているに違いない。

定時制高校の授業見学会後の感想で、高校生を授業で構っておられる先生に対して、「公平」ではないという感想を記した学生。彼らが教壇に立って多様な生徒を前にしたとき、「彼らと異なる意識の生徒」を「彼らと同じ意識の生徒」と同様に「構う」ことができるのか？

このことは、今後の研究課題として明らかにしていかなければならない。

３．３　高校側の感想

高校生は、全員が次に示すように、学生による AT を好意的・積極的に捉えている。

・毎回、同じ AT の先生から教えていただきました。教えていただく毎にだんだん分かるようになってきて、試験の成績も 20 点ぐらい上がりました。今までは、理解できなければすぐに諦めてしまっていましたが、今は、少しでも分かるところから解こうとしたり、友達や先生に質問もするようになり、化学が前よりもずっと好きになりました。レポート用紙にまとめて書いてもらった解説は、とても分かりやすくて見やすく、本当に助かりました。AT の先生の OPL 授業も、クラスの皆も言っていましたが、とても分かりやすかったですよ。これからも、化学の授業、頑張っていこうと思います。ありがとうございました。
・AT の先生から教えていただいたときは、初めはやはりビクビクしていたのですが、たくさん話しかけてくださったので授業に集中できました。困っているとすぐにヒントを出してくれたり、分かっているかどうか確認もしてくれて、正直、助かりました。何気ない会話にも付き合ってくれたので、次の授業を楽しみに待つようになっています。

３．４　中学校側の感想

中学校の担当教諭からも、次に示すような感謝の言葉をいただいている。

・夏休み勉強会に対する学習支援員派遣について、大学側の学生に対する事前指導が行き届いており、実施した担当教師からの苦情は一点もなく、皆、感謝の気持ちを伝えてきている。（瀬戸市立幡山中学校長）
・躓きや疑問は生徒個々によって様々であるので一斉指導で解決してあげるのは難しい。指導者１人に対して生徒５人くらいの環境であれば、理解の度合いが格段に違うので、学生達の献身的な参加はたいへん有意義であった。（瀬戸市立幡山中学校　３学年主任）
・数学を特に苦手とする生徒を集めた、半ば強制的な夏休み数学勉強会で、目標に到達したら翌日からは出席しなくても良いことにしていたが、学習支援員の学生は皆しっかりと個々の生徒を構ってくれていました。また、その努力が生徒自身に合ったらしく、結局、全員最終日まで出席して勉強しました。ありがとうございました。（瀬戸市立祖東中学校　数学担当者）

このような高い評価を受けているのは、個々の生徒をよく構い、その生徒に合った学習支援ができている証と受け止めている。今後は、中学校での夏休み勉強会での学習支援の機会を拡大し、さらに多くの学生が参加できるようにしていかねばならないと考えている。

３．５　今後の課題

すでに記述しているが、今後の課題として次の四点を挙げておく。

① 理科教育法の講座の中に実験授業の時間を組み入れて、高校での実験・実習授業の AT 体験実習を観察して得られた知見を、理科教育法の講座の中で活かしていかなければならない。
② 教職課程の学生が教師に対して抱いている「公平性」に関して、「彼らと異なる意識の生徒」を「彼らと同じ意識の生徒」と同様に「構う」ことができるのかという点については、今後の研究課題としていかねばならない。
③ 大学コンソーシアムせとの協働プログラムを進めて、中学校での夏休み勉強会での学習支援の機会を拡大し、さらに多くの学生が参加できるようにしていかねばならない。
④ 教職課程フォーラム及び教育談話会についてもさらに発展させていかねばならない。

４．まとめ

3.1.3 で示した学生 K については、教職課程講座「教

職実践演習」を受講した後に次のような所感を述べていることを示しておく。

・定時制の授業では、生徒達から先生に「その漢字の読み方は？」「この考え方は間違ってるの？」と、次から次へと質問が飛んでいる。先生はその質問一つひとつにしっかりと応じている。少し大げさかも知れないが、先生と生徒が授業中に話している時間は同じくらいであった。それだけ先生は生徒と関わる時間を大切にしている。時間が長ければ良いというわけではないが、時間を割いてあげることが大切であると感じた。今日学校に来ていても、明日からは来れなくなるかも知れない。これが定時制の実態であると伺った。そのため、放課だけではなく授業中でも生徒と関わる時間を大切にされておられるのだろう。また、数多くの質問があり、生徒達の授業の姿を見て、学ぶ意欲も感じた。

『ある生徒が先生の名前を呼び捨てにした。この時、先生は生徒に特に注意をしなかった。』このことについてあれからじっくりと考えてみた。

自分の高校時代を振り返ってみると、先生の名前を呼び捨てにしたら絶対に叱られていた。でも、あの先生は何故注意をしなかったのか。小牧高校定時制としては、高校が楽しくて来たくなるようにすること、生徒から高校を取り上げたらどうなるのかを常に考えていると、教頭先生の講話にあった。

これらのことから、今では、生徒を平等・公平に構うとは、個々の生徒の状況に合わせて指導することであると考えるようになっている。私の高校時代に、工業高校の複数ある学科で、学科によって指導方法が違っていたのも、今思えば、このことなんだと理解できる。

今日の高校現場では、保護者を含めて、生徒の性格や能力は多様化し、極めて個人的で過剰な期待や要求、中には無理難題を押しつけてくる場合も生じている。このことについては、保護者自身の学校での経験に基づく教師に対する不信感（松田、2008）[7]や、教育の自由化に起因する教育の商品化、保護者の顧客化と過剰な権利意識（尾木、2008）[8]が現場の教師を苦慮させているとの指摘がなされている。さらに、教育問題、とりわけ教師の不祥事に関するマスメディアの取り扱い方は、「新聞の週刊誌化」と言わざるを得ないのが現状である。

近年、各県の教育委員会から、求める教師像として「粘り強さがある人」という項目が取り上げられるようになった背景には、このような事情、及び、本論文の１で述べたように、公立学校教育職員の精神疾患を含む病気休職者の増加がある。

しかしながら、教師を志す学生を指導するに当たって、学校や教師に対する厳しい現状がある中でも、生徒達の生活と学びの中心はやはり学校であるからこそ、「生徒を構う」という資質を身につけさせたいと強く思う。

「学ぶということがどんなに喜びであるか、教えるという仕事がどれほど手応えの確かな生涯を賭けるにふさわしい素敵な職業であるか－（中略）－学校が楽しい所であってどうしてならないのだ」という言葉[9]や、「教師の仕事というのは、トコトン子どもを顧客としてとらえて、職務に邁進することにあり、保護者の満足は『子どもが楽しく学校に通っている』という姿を見ること・確認することを通して果たされる」という指摘[10]に、強く共感するからである。

謝辞

本研究は、「愛知工業大学教育・研究特別助成」として、愛知県立瀬戸北総合高等学校、瀬戸市立幡山中学校、瀬戸市立祖東中学校の協力を得て行った。高校・中学校及び瀬戸市教育委員会、大学コンソーシアムせと、並びに本学の関係の皆様に感謝の意を申し上げます。

参考資料・文献

1）平成 23 年度公立学校教職員の人事行政状況調査について　文部科学省 2011
2）林間学校中に小学５年生徒が宿泊施設で転落したのは引率教員に過失があるとされた事例
大阪地方裁判所　平成 24 年 11 月 7 日判決
3）愛知が求める教師像　愛知県教育委員会　2013
4）塩澤雄一（2012）：教員志望者が学校現場に入るメリット　教職課程 Vol.30 No.14,p.8-11
5）原田唯司、刑部吏（2004）：中学生が指導を受け入れることができると見なす教師像について：生徒は中学校教師のどのような資質を“迫力がある”と認識しているか
静岡大学教育実践総合センター紀要.10,p.63-84
6）原田唯司、刑部吏（2005）：中学生が指導を受け入れることができると見なす教師像について：生徒はどのような特徴を持つ教師像を望んでいるか
静岡大学教育実践総合センター紀要.11,p.87-98
7）松田智子（2008）：公立義務教育学校における保護者対応の現在
『京都光華女子大学短期大学部研究紀要』 v.46
8）尾木直樹（2008）：アンケート調査報告「モンスターペアレント」の実相
『法政大学キャリアデザイン学部紀要』 v.5
9）山田洋次監督（1993）：映画「学校」のポスター
10）小野田正利（2011）：保護者と学校の関係をつなぎなおす　『教育』 3 2011 No.782

（受理　平成 26 年 3 月 19 日）